

野上豊一郎

南山松竹園

南山松竹圖

私の失われたる「南山松竹図」について話すには、七年前の大震災火災から始めねばならぬ。激動が関東の地盤を揺がした瞬間に、私は日光剣ヶ峰のほとりを雨に濡れて急ぎ下っていた。其処でも山崩れがして、谷が鳴り響いた。宇都宮まで来て初めて私は東京が焼けていることを知った。けれどもその火が多く、の気の毒な生命と共に私の大切な「南山松竹図」を焼いていようとは夢にも知らなかった。汽車は少し行っては止まり、少し行っては

止まりした。途中から火が見え出し、その火が拡がり近づいた。不安と焦燥が汽車の中に充ちた。夜中の二時頃に川口町で止まって、もう動かなかつた。膿うんだような月の光の中を、長い列がつづいて、皆だまって急いだ。西ヶ原の高峰に上ると、前には火の海があつた。あたりの沈黙を越えて遠くの方から名状しがたい複雑な叫喚が聞こえて来るのを感じた。その辺から道灌山の方へかけて、私の家の在る付近は真つ暗であつた。

翌る日、火の手は上野の山を越えて此の辺に押し寄せ来そうだという噂がひろまつた。往来は避難者の列で

一ぱいであつた。皆上野の方から来て、西の方へ流れて行つた。夕方とうとう私たちも家を見棄てることに決心した。有合せの金と米だけを持って、米をば乳母車に乗せて、さしあたり小石川の知合の家まで落ち延びることにした。その時私は書齋へ入つて、灰にすることにあきらめた書物の棚を見廻したが、次の間の座敷に懸かっていた漱石先生の書額のことを思い出し、これだけでもと思ひ、金箔の部分にナイフを入れて、まくりにして米櫃と一緒に乳母車に入れた。もちろん私は、私にとつてもつともつと愛惜の深い先生の形見の画幅のことを忘れて

はいなかった。けれどもそれは私の家にはなかった。早稲田の先生の家に戻っているか、まだ春陽堂へ行ってるか、わからなかった。春陽堂へ行ったらあぶないなと思ったが、三色版には夏休前に取ってしまったと聞いていたし、これだけは私が門外不出にして大事にしていたことを皆んな知ってる筈だから、私の希望通りもうとつくに早稲田に取り戻してくれてあるだろうとも思われた。今更どうすることも出来ないが。どうかそうあつてほしいと念じた。

尤もそれは書額を切り裂く時の瞬間的の感想で、次の

瞬間には私は戦争のような誼囂と恐慌の中に捲き込まれていった。私たちは幸いに焼け残った家にすぐ帰ることは出来たが、それから安定のない日が長くつづいた。はつきりと覚えてはいないが、その間もしょっちゅう「南山松竹図」のことが気になっていったように記憶する。それから早稲田に問い合せて、まだ春陽堂に預けたままになっていったことを知った。私は半ば失望した。春陽堂が焼けたことは知っていた。私の書幅を命からがら持ち出してくれる人があったらうとは容易に思えなかった。

併し、焼かれては大変だと思いとますます不安になっ

た。ほかの画幅や短冊ならあきらめてもいいが、あの画幅だけは無くしてはならなかった。私は先生があこの画を仕上げた時の満足そうな顔付を思い出した。傑作が出来たよ、見せてやろうか。そう云って書斎から捲いた画仙紙を取って来て、いつもきま^{うしろ}って坐る後の更紗のからかみに拵げて鋏で留めた。紙面の半分以上は松山で、下の方は竹林であった。竹林は雨雪点とか胡椒点とか云ったような描法で、その中を一筋の往来が斜に通^り、南側に人家が古^く列^{んで}いた。その上の松山の中腹にも人家が列^{んで}いた。何より著しいことは、無^数に排^列

された松が、すべて同じ密度で同じ大きさに描かれてあることであつた。驚くべく根気のいい画であるが、その表現に素人でなければ到底描けない遅拙な所があつて、それが誠に温順な気持のよい調子を作つていた。私は尊敬の念を起し、同時にまた欲しくなつた。先生の描いた半折の南画風の最初のものであるし、くださいと云つても、くれないだろうとは思つたが、そう云わずにはいられなかつた。すると、これ以上の傑作が出来たらやつてもいいと云われた。そう云つて自分でもしみじみと眺めていた。その時に限らず、先生は画を描いた時は、い

つも余程たのしそつであつた。

大正元年十一月十八日津田青楓君宛の先生の手紙に斯ういう文句がある。——今日縁側で水仙と小さな菊を丁寧にかきました。私は出来栄の如何より書いた事が愉快です。書いてしまえば、今度は出来栄によつて楽しみが増減します。私は今度の画は破らずに置きました。此つぎ見て下さい。

はなのうちはうまく行かないので、よく自分で破いていたが、次第に思うように描けて来ると、破るところではなく、自分で見て楽しんでた。それでも画のわからな

いやつが来ると、どんどん捲いてしまったりもした。猫の画を見て、虎のようですね、と云ったりする者もあった。そんな時はまたそれ相当の受けこたえをしていた。菊とか竹とか文人画風の小品をよく描いたが、私も竹の画を一枚もらったが、その種類の画でうまいと思ったのはなかった。のんきで、気持はいいのだけけれども、どことなく間がぬけて感心しなかった。私は先生の画の讚美者ではあったが、文人画風の画に対してはあまり讚辞は奉らなかつた。私が讚嘆するのは先生の半折の南画風の山水である。そのうちの二三点の如きは幾らほめてもほ

めすぎることはないと思じている。その種類の半折を生は八枚描いた。「南山松竹図」がその最初のものであり、そうして、私に云わせれば、その最上のものであった。「南山松竹図」はどうとう私がもらったが、あとの七枚は亡くなるまで大事に先生自身が保存してあった。よい表具屋はないかというので、私は神田の栗原というのを紹介した、先生は皆その栗原に表装させ、自分で箱書をして、しまっておかれた。私のも表装が出来て、持って行って見て貰うと、自分で墨をすって箱書をしてくださった。蓋のおもてに

南山松竹図

と書き、裏に

甲寅五月漱石自題

として、その下に判を押した。その画を夏目家に預ける時、版屋の手に渡るのでから箱をこわされてはこまると思い、わざと中身だけを抜いて風呂敷に包んで使の者に渡した。それがため偶然にも今日まで箱だけは記念にのこっている。

甲寅というは大正三年であるが。その画の作られたのは大正二年の春か、元年の冬であったように思う。大正

二年の十二月に私は青楓君と先生に同伴して三田の岡田平太郎氏の家に遊びに行つた。茶室でお茶を呼ばれて、書画を見せてもらった。先生はお世辞を云わない人だから、主人の自慢の雪舟などにも一向感心した様子を見せなかつた。却つて無雑作に懸けて見せた高芙蓉の小さい軸物に興味を持ち、それのみをほめた。その月八日の私への手紙に、——先達ては難有う、私は別に岡田さんへに礼状を出さないから君から宜しく願います。景清の画（これは私が沼波瓊音君の雑誌「俳味」の裏面に描いた能のスケッチ）は簡単で調つていて傑作です。私にはあんな

ものは到底かけない。高芙蓉の画を見てから僕も一枚かいたが、どうもうまく行かない。生涯に一枚でいいから有がたい感じのする絵が描きたい。山水動物花鳥何でも構わない。ありがたいので人が頭を下げるような崇高の気分を持ったものをかいて死にたい。とあった。その高芙蓉に刺戟されて描いた山水画は「閒来放鶴」と題する半折で、また山の皺を幾つも重ね、その間に松を幾つも整列させ、遠景には巨然の向を張ったような偉大なるつくね芋を聳立させ、近景の竹溪は今字点もどきに濃淡をつけて、技巧からいうと一段の進境を示しているが、そ

れだけ「南山松竹」に比して平凡になったことは免かれなかつた。高芙蓉の影響と云つても、中景に寺塔が隠見していることが似ている位で、全体の効果の上から云うと、原作は稍暗い画であるに対し、新作は明るいものになつてきている。之が先生の力作第二番の画であつた。そうして此の画の完成がきっかけになつて、先生はまだ幾らもよいのが描けるといふ自信が出来たと見えて、「南山松竹」を手放すことになつたのである。それまでに随分長い間私は待たされていた記憶があるから、「南山松竹」の出来たのはその前の年（大正元年）の冬か秋かで

はなかつたかと思う。

そう思える今一つの根拠は、「南山松竹」はまだ先生が日本画の絵の具を使わない頃に描いたもので、青緑も代赭も水彩画の絵の具で塗り立てたものであった。そうして日本画の絵の具は大分たつて青楓君の世話で手に入れたのであった。大正二年七月二十六日の青楓君宛の音信に、先達中より絵の具などの事にて御配慮云々とあるのが、その時のことであつたように思われる。だから少くとも二年の夏よりずっと前であつたことは推定される。否、もっと以前であつたように思えるのは、大正元

年十一月二十五日沼波瓊音君宛の手紙に、——私も作ばかりに熱心になりたい又は勉強したいのですが、少々頭の具合やからだの具合であんなつまらない画などをかきます。あなた丈ならお目にかける筈ではなかったのですが、野上君が画をかくため、ついあなたの前まで恥を曝しました。とある。その謙遜している画が矢張り「南山松竹」であつたように覚えている。はつきりしないのはあるが、川波君と二人で先生を訪ねると、あれを描き直したと云つて、例のからかみに貼りつけて見せた。見ると、紙面の上部の方にまた一つ山が描き足されて、余

白の少くなつた所へ持つて来て、澗上淡煙横古駅の七絶が贗せられ、漱石山人詩画と落款がすわっていた。それですっかり落ちついてしまった。

ところが、もう私のものになつて、箱書までして下さつたはずと後のことであるが、あの画を持つて来てくれと云われて、或る木曜会の晩に持つて行くと、題詩の平仄がちがっていたと云つて、承句の雲外白日照荒亭の初めの二字を消して峽中と書き直した。私はちよつと困つたけれども、却つておもしろいとも思つた。沼波君はそれが私の所有となつてから、先生の了解を得て、「俳

味」の口絵に写真版として入れ、小杉未醒氏なども感心したと云っていた。

そういう風にして因縁の深い「南山松竹図」が春陽堂から或る製版屋の手に渡したままになっていて、其処で焼けてしまったと聞いた時の私の失望の心持はいつまでも忘れないであろう。殊に色刷にする手続は早くすんでしまっていたと聞いて居り、私から度々催促したにも拘らず返してくれなかったのであるから、私は関係した人達を恨んだ。あの品格の高い画が、私の手から失われたことを恨むのみでなく、世界から永久に失われたこと

を恨まずにはいられなかった。

その後先生の未亡人は私に代償として半折中のどれでも選めと云ってくれ、私は辞退すべき心持と先生の形見の形見として頂いて置きたいと思う心持との間に挟まれて躊躇したが、友人にも勧められて「孤客入石門図」を割愛して貰った。その画も甚だ結構ではあるが、その画を懸けて眺める度に南山松竹図の幻影が現われることを私にはどうすることも出来ない。(昭和四年七月)

日本文学電子図書館

南山松竹図

著 者：野上豊一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館